

今回の開催国はドイツだった。

持ち回りで開催国も地方も変わるせいで、毎回確認を怠ると、全く違う場所に向かつてたりする。

互いにどちらかが覚えているだろうと、安直気味な2人は、のんびり車に乗り込でいく。

ジャンケンの末、運転手がフランスに決まると、呑気な会話が再開されていく。

「今回って、ミュンヘンやつけ？」

「ケルンじゃなかったっけ？」

いつもの事ながら適当だと思いつつも、確認のためにスマホを開く。

随分前にドイツから送付された開催日時と場所を記したメールを探し当てたスペインは、ざっと流し読みしてから顔を上げた。

「ケルンで合つとるわ、ルクセン通った方が早いんとちゃう？」

「遠いな・・いつそ飛行機で行っちゃおう？」

「俺んちから？フランスのとこストライキ中？」

淡々と行き来していた会話が、僅かに滞った。

それだけでも、結果は分かりきっていたが、隣から苦笑交じりに告げられる。

「あゝ、今日は・・ダメだね」

「ほな、車な」

「はいよ」

国としての特殊な特権は様々だが、普通の何倍ものスピードで移動することが可能だった。

そうでなければ、会議に行くだけで何日もかかる羽目になる。

一時間もかからずに会場に到着したフランスは、車から降りると、身だしなみを整え始める。

その隣では大きな欠伸を零していたスペインは、のんびりした足取りで会場に向かつていく。

ホテルが会場になる事が多く、今回も例外ではなかった。

数日に渡って開催される場合は、そのまま宿泊になるが、今回は当日のみのおかげで、身軽な者も多い。

何気ない世間話をしながらエントランスまで来れば、見知った顔に遭遇する。

「ボンジュール、日本、今日も可愛いね」

自分達なんかよりも、よっぽど長寿なのに、それを思わせない幼い顔立ちと、小柄で華奢な体付き。

中身は一癖も二癖もあるジジイなのに、それを窺わせる容姿は、いつ見ても不思議に映る。

「おはようございます、フランスさん、スペインさん、今日はお早いですね」

「おう、お前ら、グーテン・モルゲン」

隣で同じように挨拶している人物を、敢えて視界に入れないフランスと、スペインは、そのまま軽く日本を引き寄せた。

柔らかくハグしてから頬にキスするフランスに、照れくさそうに微笑んだ日本は、柔らかな笑みを返してくれる。

フランスと入れ替わりに同じように軽くハグしてから、頬にキスしたスペインは、得気な顔で笑う。

「今日は寝坊せ〜へんかったで」

「珍しく叩き起こさずに済んだよ」

軽く笑って言葉が続けるフランスに、日本は微笑ましそうに目を細めたが、その隣にいたスペインは、少し不服そうに呟いた。

「珍しいは余計やっ」

「お前がちゃんと起きてるなんて、雨降るな」

横から茶々を入れる声にも、フランスは聞こえてない素振りで日本と話しかけていく。

「日本は昨日から来てるの？」

間に挟まれて困った日本は、チャリと隣を見やってから困惑気味に微笑んだ。

「ええ、昨夜到着しまいで．．」

「くっそ、一人楽しすぎるぜ！」

相手にしてもらえず、涙目でそっぽを向くプロイセン

に、楽しそうに笑ったフランスとスペインは、体当たりするように抱きついていく。

「冗談やって、オ〜ラ」

右頬に挨拶のキスをしてから離れるスペインとは対照的に、フランスは抱きついたついでに胸元やら尻を撫で回し始める。

「ボンジュ〜ル、ほんつとプ〜ちゃんって、イイ体してるよね〜」

「や、やめるお〜〜！」

遠慮のない触り方と荒い息遣いに、そんな構われ方は御免だと言いたげに足蹴で応戦する。

ジャレ合っている2人を笑って眺めていたスペインは、チャラチャラと金属がぶつかるような音がしていることに疑問を感じていた。

それは、プロイセンが動く度に聞こえ、音の出所は注意深く観察してみる。

服装はいつもと変わらなかったが、尻ポケットからベルトにシルバーのチェーンが伸びていることに気付いた。

「なんやオシヤレなもん付けてるやん」

よく見えるように深く腰を落としたスペインは、チェーンを軽く撮み上げた。

2重にクロスしてるチェーンは、何かと何かを繋いで

いるだった。

「ああ、それか、カッコいいだろ！」

自信満々に笑うプロイセンの隣で、少しだけ気まずそうに顔を歪ませる日本がいた。

しかし、それを追求するよりも前に、尻ポケットから出された物を目にしただけで理解出来た。

「この間、ジジイの蔵で見つけたんだぜ！」

ご満悦で見せつけられたのは、ド派手な財布だった。黒革の長財布は十字架とドクロが、デカデカとプリントされており、四隅にはアクセントにシルバーのピンボタンが付けられている。

ピンボタンの内、一つだけは丸カンになっており、そこにナスカンで繋がったシルバーのチェーンが、ズボンのベルトループに引っ掛けてある。

思わず言葉を失っていた一行を他所に、プロイセンはドヤ顔で胸を反らしていた。

微妙な空気に居た堪れなくなり、日本が口を開こうとした寸前、ドツと笑い声が広がった。

「すっげえ〜！めっちゃ、プ〜ちゃんっぽい」

「うわあ！本当カッコいい〜!! お兄さん、死んでも持ちたくないけど」

「俺様のセンス最高〜！ケセセセつ」

「めっちゃ、カッコええで〜!! 親分も使いたないけどな〜」

遠慮のない三者三様の言い分は、全く噛み合っていないが大爆笑の渦には変わりなかった。

非難するよりも先に笑い飛ばしてくれたことに、こっそり安堵していた日本は、白々しく続けた。

「少し前に流行ってまして、お好きかと・ハハ」

乾いた笑みを浮かべる日本に、フランスとスペインも気持ちは分かると言いたげに肩を叩いた。

「流石、プ〜ちゃん男前っ！よく似合うで！」

「世界中探しても、プ〜たん以上に似合う人はいないよっ」

「そうだろう、ついに俺様の本当の姿を見せる時がきたようだな！」

ラテン組のリップサービスに、すっかりいい気分のプロイセンは、必要以上にカッコつけて財布を戻すと、右手でゆっくりと左腕を撫でつけていく。

「この左腕に封印されし、漆黒の刃が解き放たれし時、新たな現世の始まりだぜ！ケーセッセセ！」

天然ものの銀髪に真紅の瞳で意味ありげに言えば、それだけで様になってしまう。

お得意の厨二ポーズに笑うどころか、すぐさま真剣な顔に変わったフランスは、更に悪ノリを重ねていく。